

保吉の手帳から

芥川龍之介

青空文庫

わん

ある冬の日の暮、保吉は薄汚いレストランの二階に脂あぶら臭くさい焼パンを齧かじっていた。彼のテエブルの前にあるのは亀裂ひびの入った白壁しろかべだった。そこにはまた斜はすかいに、「ホット（あたたかい）サンドウィッチもありません」と書いた、細長い紙が貼はりつけてあった。（これを彼の同僚の一人は「ほつと暖いサンドウィッチ」と読み、真面目まじめに不思議ふしぎがったものである。）それから左は下へ降りる階段、右は直すぐに硝子窓ガラスだった。彼は焼パンを齧かりながら、時々ぼんやり窓の外を眺めた。窓の外には往來の向うに亜ト

鉛屋根タンヤネの古着屋が一軒、職工用の青服だのカアキ色のマントだのをぶら下げていた。

その夜学校には六時半から、英語会が開かれるはずになってい
た。それへ出席する義務のあつた彼はこの町に住んでいない関係
上、厭いやでも放課後六時半まではこんなところにいるより仕かたは
なかつた。確かたし土岐哀果ときあいか氏の歌に、——間違つたならば御免なさ
い。——「遠く来てこの糞くそのよなビフテキをかじらねばならず妻
よ妻よ恋し」と云うのがある。彼はここへ来る度に、必ずこの歌
を思い出した。もつとも恋しがるはずの妻はまだ貰つてはいなか
つた。しかし古着屋の店を眺め、脂あぶら臭らくさい焼パンをかじり、
「ホット（あたたかい）サンドウィッチ」を見ると、「妻よ妻よ

恋し」と云う言葉はおのずから唇くちびるに上のぼつて来るのだった。

保吉はこの間あいだも彼の後うしろに、若い海軍の武官が二人、麦酒ビールを飲んでゐるのに気がついていた。その中の一人は見覚えのある同じ学校の主計官しゅけいかんだつた。武官に馴染なじみの薄い彼はこの人の名前を知らなかつた。いや、名前ばかりではない。少尉級か中尉級かも知らなかつた。ただ彼の知つてゐるのは月々の給きゆうきん金ひとりを貰う時に、この人の手を経へると云うことだけだつた。もう一人は全然知らなかつた。二人は麦酒ビールの代りをする度に、「こら」とか「おい」とか云う言葉を使った。女中はそれでも厭いやな顔をせず、両手にコップを持ちながら、まめに階段のぼを上おり下くだりした。その癖くせ保吉のテエブルへは紅茶を一杯いっぱい頼たのんでも容易いに持つて来てはくれな

った。これはここに限ったことではない。この町のカフェやレス
トランはどこへ行つても同じことだった。

二人は麦酒を飲みながら、何か大声に話していた。保吉は勿^{もちろ}
論^んその話に耳を貸していた訣^{わけ}ではなかった。が、ふと彼を驚か
したのは、「わんと云え」と云う言葉だった。彼は犬を好まなか
った。犬を好まない文学者にゲエテとストリントベルグとを数え
ることを愉快^{ゆかい}に思っている一人だった。だからこの言葉を耳にし
た時、彼はこんなところに飼^かつてい勝ちな、大きい西洋^{せいよう}犬を想
像した。同時にそれが彼の後ろ^{うし}にうろついていそうな無気味^{ぶきみ}さを
感じた。

彼はそつと後ろを見た。が、そこには仕合せと犬らしいものは

見えなかつた。ただあの主計官が窓の外を見ながら、にやにや笑つてゐるばかりだつた。保吉は多分犬のいるのは窓の下だろうと推察すいさつした。しかし何だか変な気がした。すると主計官はもう一度、「わんと云え。おい、わんと云え」と云つた。保吉は少しからだ体をねじ曲まげ、向うの窓の下を覗のぞいて見た。まず彼の目にはいつたのは何とか正宗まさむねの広告を兼ねた、まだ火のともらない軒燈けんとうだつた。それから巻ひいてある日除ひよけだつた。それから麦酒樽ビールだるの天てんすいおけんすいおけ水桶づまの上に乾ほし忘れたままの爪革つまかわだつた。それから、往來の水たまりだつた。それから、——あとは何だつたにせよ、どこにも犬の影は見なかつた。その代りに十二三の乞食こじきが一人、二階の窓を見上げながら、寒そうに立っている姿が見えた。

「わんと云え。わんと云わんか！」

主計官はまたこう呼びかけた。その言葉には何か乞食の心を支配する力があるらしかった。乞食はほとんど夢遊病者のように、目はやはり上を見たまま、一二歩窓の下へ歩み寄った。保吉はやつと人の悪い主計官の悪戯あくぎを発見した。悪戯？——あるいは悪戯ではなかったかも知れない。なかったとすれば実験である。人間はどこまで口腹こうふくのために、自己の尊厳を犠牲ぎせいにするか？——と云うことに関する実験である。保吉自身の考えによると、これは何もいまさらのように実験などすべき問題ではない。エサウは焼肉のために長子権ちようしけんを抛なげうち、保吉はパンのために教師きようしになった。こう云う事実を見れば足りることである。が、あの実験心理学者

はなかなかこんなことぐらいでは研究心の満足を感ぜぬのである。それならば今日生徒に教えた、*De gustibus non est Disputandum*である。蓼食^{たたく}う虫も好き好き^ずである。実験したければして見るが好い。——保吉はそう思いながら、窓の下の乞食を眺めていた。

主計官はしばらく黙っていた。すると乞食^{こじき}は落着かなそうに、往^{おうらい}来の前後を見まわし始めた。犬の真似^{まね}をすることには格別異存はないにしても、さすがにあたりの人目だけは憚^{はばか}っているのに違いなかった。が、その目の定まらない内に、主計官は窓の外へ赤い顔を出しながら、今度は何か振って見せた。

「わんと云え。わんと云えばこれをやるぞ。」

乞食の顔は一瞬間、物欲しさに燃え立つようだった。保吉は時々乞食と云うものにロマンティックな興味を感じていた。が、憐れんびん憫とか同情とかは一度も感じたことはなかった。もし感じたと言うものがあれば、莫ぼ迦かか嘘うそつきかだとも信じていた。しかし今その子供の乞食が頸くびを少し反そらせたまま、目を輝かせているのを見ると、ちよいといじらしい心もちがした。ただしこの「ちよいと」と云うのは懸かけ値ねのないちよいとである。保吉はいじらしいと思うよりも、むしろそう云う乞食の姿にレムブラント風の効果を愛していた。

「云わんか？ おい、わんと云うんだ。」
 乞食は顔をしかめるようにした。

「わん。」

声はいかにもかすかだつた。

「もつと大きく。」

「わん。わん。」

乞食はとうとう二声鳴いた。と思うと窓の外へネエベル・オレンジが一つ落ちた。——その先はもう書かずとも好いい。乞食は勿論オレンジに飛びつき、主計官は勿もちろん論笑つたのである。

それから一週間ばかりたつた後、保吉はまた月給日に主計部へ月給を貰いに行った。あの主計官は忙いそがしそうにあちらの帳簿ちようぼを開いたり、こちらの書類を拈ひろげたりしていた。それが彼の顔を見ると、「俸給ほうきゆうですね」と一言ひとこと云つた。彼も「そうです」と

一言答えた。が、主計官は用が多いのか、容易よういに月給を渡さなかつた。のみならずしまいには彼の前へ軍服の尻しりを向けたまま、いつまでも算盤そろばんを弾はじいていた。

「主計官。」

保吉はしばらく待たされた後のち、懇願こんがんするようになつた。

主計官は肩越しにこちらを向いた。その唇くちびるには明らかに「直すぐです」と云う言葉が出かかっていた。しかし彼はそれよりも先に、ちやんと仕上げをした言葉を継ついだ。

「主計官。わんと云いましょうか？ え、主計官。」

保吉の信ずるところによれば、そう云つた時の彼の声は天使よりも優しいくらいだった。

西洋人

この学校へは西洋人が二人、会話や英作文を教えに来ていた。

一人はタウンゼンドと云う英吉利人、もう一人はスタアレットと云う亜米利加人だった。

タウンゼンド氏は頭の禿げた、日本語の旨い好々爺だった。由来西洋人の教師きょうしと云うものはいかなる俗物にも関らずシエクスピアとかゲエテとかを喋ちやうちやう々々してやまないものである。しかし幸いにタウンゼンド氏は文芸の文の字もわかったとは云わない。いつかウワアズワアスの話が出たら、「詩と云うものは全然わか

らぬ。ウワアズワアスなどもどこが好よいのだろう」と云った。

保吉やすきちはこのタウンゼンド氏と同じ避暑地ひしよちに住んでいたから、

学校の往復にも同じ汽車に乗った。汽車はかれこれ三十分ばかりかかる。二人はその汽車の中にグラスゴオのパイプを啣くわえながら、煙草たばこの話だの学校の話だの幽霊ゆうれいの話だのを交換した。セオソフイストたるタウンゼンド氏はハムレットに興味を持たないにしても、ハムレットの親父おやじの幽霊には興味を持つていたからである。

しかし魔術とか鍊金術れんきんじゆつとか、occult sciencesの話になると、

氏は必ずもの悲しそうに頭とパイプとを一しよに振りながら、

「神秘とびらの扉とびらは俗人の思うほど、開ひらき難いものではない。むしろその恐ゆえんしい所以よういは容易よういに閉じ難いところにある。ああ云うものには

手を触れぬが好い」と云った。

もう一人のスタアレット氏はずっと若い洒落者しやれものだった。冬は暗緑色のオオヴァ・コートに赤い襟えりまき巻などを巻きつけて来た。

この人はタウンゼンド氏に比べると、時々は新刊書も覗のぞいて見られるらしい。現に学校の英語会に「最近のアメリカのアメリカ小説家」と云う大講演をやったこともある。もつともその講演によれば、最近の亜米利加の大小説家はロバート・ルイズ・ステイヴンソンかオオ・ヘンリーだと云うことだった！

スタアレット氏も同じ避暑地ではないが、やはり沿線のある町にいたから、汽車を共にすることは度たびあった。保吉は氏とどんな話をしたか、ほとんど記憶に残っていない。ただ一つ覚えて

いるのは、待合室の煖炉だんろの前に汽車を待っていた時のことである。保吉はその時欠伸あくびまじりに、教師と云う職業の退屈たいくつさを話した。すると縁無しふちなの眼鏡めがねをかけた、男ぶりの好いよスタアレット氏はちよいと妙な顔をしながら、

「教師になるのは職業ではない。むしろ天職と呼ぶべきだと思う。

You know, Socrates and Plato are two great teachers …… Etc.] 云々
 った。

ロバート・ルイズ・ステイヴンソンはヤンキイでも何でも差支えない。が、ソクラテスとプレトオをも教師だったなどと云うのは、——保吉は爾来じらいスタアレット氏に慇懃いんぎんなる友情を尽すことにした。

ひるやす
午休み

——或空想——

保^{やすきち}吉は二階の食堂を出た。文官教官は午^{ひるめし}飯の^{のち}後はたいてい隣の喫^{きつえん}煙室へはいる。彼は今日はそこへ行かずに、庭へ出る階段を降^{くだ}ることにした。すると下から下士が一人、一飛びに階段を三段^{いなき}ずつ蝗^{いなご}のように登つて来た。それが彼の顔を見ると、突然^げ厳^{げん}格^{かく}に拳^{こぶし}手の礼をした。するが早い^{ひとおど}か一躍^{おど}りに保吉の頭を躍^{おど}り越えた。彼は誰もいない空間へちよいと会^{えしやく}釈^{しやく}を返しながら、悠々と階段を降り続けた。

庭には槿まぎや榲かやの間に、木蘭もくれんが花を開いている。木蘭はなぜか日の当る南へ折角せつかくの花を向けないらしい。が、辛夷こぶしは似ている癖に、きつと南へ花を向けている。保吉は巻煙草まきたばこに火をつけながら、木蘭の個性を祝福した。そこへ石を落したように、鶺鴒せきれいが一羽舞い下さがつて来た。鶺鴒も彼には疎遠そえんではない。あの小さい尻尾しっぽを振るのは彼を案内する信号である。

「こつち！ こつち！ そつちじゃありませんよ。こつち！ こつち！」

彼は鶺鴒の云うなり次第に、砂利じやりを敷いた小径こみちを歩いて行つた。が、鶺鴒はどう思ったか、突然また空へ躍おどり上つた。その代り背の高い機関兵が一人、小径をこちらへ歩いて来た。保吉はこの機

関兵の顔にどこか見覚えのある心もちがした。機関兵はやはり敬礼した後、さつさと彼の側を通り抜けた。彼は煙草の煙を吹きながら、誰だったかしらと考え続けた。二歩、三歩、五歩、——十歩目に保吉は発見した。あれはポオル・ゴオギャンである。あるいはゴオギャンの転生である。今にきつとシャヴルの代りに画筆を握るのに相違ない。そのまた挙句に気違いの友だちに後ろからピストルを射かけられるのである。可哀そうだが、どうも仕方がない。

保吉はとうとう小徑伝いに玄関の前の広場へ出た。そこには戦利品の大砲が二門、松や笹の中に並んでいる。ちよいと砲身に耳を当てて見たら、何だか息の通る音がした。大砲も欠伸をする

かも知れない。彼は大砲の下に腰を下した。それから二本目の巻煙草へ火をつけた。もう車廻しの砂利じやりの上には蜥蜴とかげが一匹光つてゐる。人間は足を切られたが最後、再び足は製造出来ない。しかし蜥蜴は尻しつ尾ぼを切られると、直すぐにまた尻しつ尾ぼを製造する。保吉は煙草を啣くわえたまま、蜥蜴はきつとラマルクよりもラマルキアンに違いないと思つた。が、しばらく眺めていると、蜥蜴はいつか砂利に垂れた一すじの重油に変わってしまった。

保吉はやつと立ち上つた。ペンキ塗りの校舎に沿いながら、もう一度庭を向うへ抜けると、海に面する運動場へ出た。土の赤いテニス・コートには武官教官が何人か、熱心に勝負を争っている。コートの上の空間は絶えず何かを破裂させる。同時にネットの右

や左へ薄^{うすしろ} 白い直線^{ほとぼし}を迸^{ほとぼし}らせる。あれは球^{たま}の飛ぶのではない。目に見えぬ三鞭酒^{シャンパン}を抜いているのである。そのまた三鞭酒^{シャンパン}をワイシャツの神々が旨そうに飲んでいるのである。保吉は神々を讚美しながら、今度は校舎の裏庭へまわった。

裏庭には薔薇^{ばら}が沢山ある。もつとも花はまだ一輪もない。彼はそこを歩きながら、径^{みち}へさし出た薔薇の枝に毛虫^{けむし}を一匹発見した。と思うとまた一匹、隣の葉の上にも這^はっているのがあつた。毛虫は互に頷^{うなず}き頷^{うなず}き、彼のことか何か話しているらしい。保吉はそつと立ち聞きすることにした。

第一の毛虫 この教官はいつ蝶^{ちよう}になるのだろうか？ 我々の曾々^{そそそそ}祖^{そそそそ}父^{そそそそ}の代から、地面の上ばかり這^はいまわっている。

第二の毛虫 人間は蝶にならないのかも知れない。

第一の毛虫 いや、なることはなるらしい。あすこにも現在飛んでゐるから。

第二の毛虫 なるほど、飛んでゐるのがある。しかし何と云う醜みにくさだろう！ 美意識びいしきさえ人間にはないと見える。

保吉は額ひたいに手をかざしながら、頭の上へ来た飛行機を仰あおいだ。

そこに同僚どうりょうに化けた悪魔が一人、何か愉快げんごうそうに歩いて来た。

昔は鍊れん金術きんじゆつを教えた悪魔も今は生徒せいとに応用おうよう化学を教えてゐる。それがにやにや笑いながら、こう保吉に話しかけた。

「おい、今夜つき合わんか？」

保吉は悪魔の微笑の中にありありとファウストの二行にぎようを感じ

た。——「一切の理論は灰色だが、緑なのは黄金こがねなす生活の樹きだ！」

彼は悪魔に別れた後のち、校舎の中へ靴くつを移した。教室は皆がらんとしている。通りすがりに覗のぞいて見たら、ただある教室の黒板の上に幾何きかの図ずが一つ描かき忘れてあつた。幾何の図は彼が覗いたのを知ると、消されると思つたのに違ちがひない。たちまち伸のびたり縮ちぢんだりしながら、

「次の時間に入用いりようなのです。」と云つた。

保吉はもと降りた階段を登り、語学と数学との教官室へはいつた。教官室には頭の禿はげたタウンゼンド氏のほかに誰もいない。しかもこの老教師は退屈まぎれに口笛くちぶえを吹き吹き、一人ダンス

を試みている。保吉はちよいと苦笑したまま、洗面台の前へ手を洗いに行つた。その時ふと鏡かがみを見ると、驚いたことにタウンゼンド氏はいつのまにか美少年に変わり、保吉自身は腰の曲つた白頭はくとうの老人に變つていた。

恥はじ

保吉やすきちは教室へ出る前に、必ず教科書の下した調べをした。それは月給を貰つてもらいるから、出たらめなことは出来ないと言ふ義務心によつたばかりではない。教科書には学校の性質上海用語が沢山出て来る。それをちゃんと検しらべて置かないと、とんでもない

誤訳をやりかねない。たとえば Cat's paw と云うから、猫ねこの足かと思つていれば、そよ風だったりするたぐいである。

ある時彼は二年級の生徒に、やはり航海のことを書いた、何とか云う小しょうひん品ひんを教えていた。それは恐るべき悪文だった。マスうなトに風が唸うなつたり、ハツチへ浪なみが打ちこんだりしても、その浪なり風なりは少しも文字の上へ浮ばなかつた。彼は生徒に訳やくどく読どくをさせながら、彼自身先に退屈し出した。こう云う時ほど生徒を相手に、思想問題とか時事問題とかを弁べんじたい興味に駆かられることはない。元來教師と云うものは学科以外の何ものかを教えたがるものである。道徳しゆみ、趣味しゆみ、人生観、——何と名づけても差さ支しえつかない。とにかく教科書や黒板よりも教師自身の心しんぞう臓ぞうに近い何も

のかを教えたがるものである。しかし生憎あいにく生徒と云うものは学科以外の何ものをも教わりたがらないものである。いや、教わりたがらないのではない。絶対に教わることを嫌悪けんおするものである。保吉はそう信じていたから、この場合も退屈し切ったまま、訳読を進めるより仕かたなかつた。

しかし生徒の訳読に一応耳を傾けた上、綿密めんみつに誤あやまりを直したりするのは退屈しない時でさえ、かなり保吉には面倒めんどうだった。彼は一時間の授業時間を三十分ばかり過すぎした後のち、とうとう訳読を中止させた。その代りに今度は彼自身一節ずつ読んで訳し出した。教科書の中の航海は不相変あいかわらず退屈を極めていた。同時にまた彼の教えぶりも負けずに退屈を極めていた。彼は無風帯を横よこぎる帆はん

船のように、動詞のテンスを見落したり関係代名詞を間違えたり、行き悩み行き悩み進んで行つた。

そのうちにふと気がついて見ると、彼の下検ベをして来たところはもうたつた四五行しかなかった。そこを一つ通り越せば、海上用語の暗礁に満ちた、油断のならない荒海だった。彼は横目で時計を見た。時間は休みの喇叭までにたつぷり二十分は残っていた。彼は出来るだけ叮嚀に、下検ベの出来ている四五行を訳した。が、訳してしまつて見ると、時計の針はその間にまだ三分しか動いていなかった。

保吉は絶体絶命になった。この場合唯一の血路になるものは生徒の質問に応ずることだった。それでもまだ時間が余れば、

早じまいを宣^{せん}してしまふことだった。彼は教科書を置きながら、「質問は——」と口を切ろうとした。と、突然まつ赤になつた。なぜそんなにまつ赤になつたか？——それは彼自身にも説明出来ない。とにかく生徒を護^ご摩^まかすくらいは何とも思わぬはずの彼がその時だけはまつ赤になつたのである。生徒は勿^{もちろん}論^{ろん}何も知らずにまじまじ彼の顔を眺めていた。彼はもう一度時計を見た。それから、——教科書を取り上げるが早いかな、無茶苦茶に先を読み始めた。

教科書の中の航海はその後^ごも退屈なものだったかも知れない。しかし彼の教えぶりは、——保吉は未^いに^{まだ}確信している。タイフウ^{たたか}ンと闘^{たたか}う帆船よりも、もっと壮烈を極めたものだった。

勇ましい守衛

秋の末か冬の初か、その辺へんの記憶ははつきりしない。とにかく学校かよへ通うのにオオヴァ・コオトをひっかける時分だった。午ひるめ飯しのテエブルについた時、ある若い武官教官が隣に坐っている保やすきち吉ちにこう云う最近ちんじの椿事を話した。——つい二三日しんこ前の深更う、鉄盗人てつぬすびとが二三人学校の裏手へ舟を着けた。それを発見した夜警中の守衛しゅえいは单身彼等を逮捕たいほしようとした。ところが烈はげい格闘かくとうの末、あべこべに海へ抛ほうりこまれた。守衛は濡ぬれ鼠ねずみになりながら、やっと岸へ這はい上った。が、勿論盗人の舟はその間あいだに

もう沖おきの闇へ姿を隠していたのである。

「大浦おおうらと云う守衛ですがね。莫迦ばか莫迦ばかしい目に遇あつたですよ。」

武官はパンを頬張ほおばつたなり、苦しそうに笑つていた。

大浦は保吉も知つていた。守衛は何人か交こう替たいに門もん側がわの詰つめ

所に控ひかえている。そうして武官と文官とを問わず、教官の出で入はいり

を見る度に、拳きよしゆ手の礼をすることになつてゐる。保吉は敬礼さ

れるのも敬礼に答えるのも好まなかつたから、敬礼する暇ひまを与え

ぬように、詰め所を通る時は特に足を早めることにした。が、こ

の大浦と云う守衛だけは容易よういに目つぶしを食わされない。第一詰

め所に坐つたまま、門の内うち外そと五六間の距離へ絶えず目を注そそいで

いる。だから保吉の影が見えると、まだその前へ来ない内に、ち

やんともう敬礼の姿勢をしている。こうなれば宿命と思うほかはない。保吉はとうとう観念かんねんした。いや、観念したばかりではない。この頃は、大浦を見つけるが早いかな、響尾蛇がらがらへびに狙ねらわれた兎うさぎのように、こちらから帽ぼうさえとつていたのである。

それが今聞けば盗ぬすびと人ひとのために、海へ投げこまれたと云うのである。保吉はちよいと同情しながら、やはり笑わずにはいられなかった。

すると五六日たつてから、保吉は停車場ていしやばの待合室に偶然大浦を発見した。大浦は彼の顔を見ると、そう云う場所にも関かわらず、ぴたりと姿勢を正した上、不相変あいかわらず厳格に拳手の礼をした。保吉ははつきり彼の後ろうしろに詰め所の入口が見えるような気がした。

「君はこの間——」

しばらく沈黙が続いた後、保吉はこう話しかけた。

「ええ、泥坊を掴まえ損じまして、——」

「ひどい目に遇つたですね。」

「幸い怪我はせずすみましたが、——」

大浦は苦笑を浮べたまま、自ら嘲るように話し続けた。

「何、無理にも掴まえようと思えば、一人ぐらひは掴まえられた

のです。しかし掴まえて見たところが、それっきりの話ですし、

——」

「それつきりと云うのは？」

「賞与も何も貰えないのです。そう云う場合、どうなると云う明

文は守衛規則にありませんから、——」

「職じゆんに殉じても？」

「職に殉じてでもです。」

保吉はちよいと大浦を見た。大浦自身の言葉によれば、彼は必ずしも勇士のように、一死を賭としてかかったのではない。賞与を打算に加えた上、捉とらうべき盗人を逸いっしたのである。しかし——保

吉は巻煙草をとり出しながら、出来るだけ快活うなずに領いて見せた。

「なるほどそれじゃ莫迦ぼか莫迦ぼかしい。危険おかを冒おすだけ損わけの訣わけですね。」

大浦は「はあ」とか何とか云った。その癖変くせに浮かなそうだった。

「だが賞与さえ出るとなれば、——」

保吉はやや憂鬱ゆううつに云った。

「だが、賞与さえ出るとなれば、誰でも危険を冒すかどうか？——
——そいつもまた少し疑問ですね。」

大浦は今度は黙っていた。が、保吉が煙草を啣くわえると、急に彼自身のマツチを擦すり、その火を保吉の前へ出した。保吉は赤あかと靡なびいた焰ほのおを煙草の先に移しながら、思わず口もとに動いた微びしょ笑うを悟さとられないように噛かみ殺した。

「難ありがと有う。」

「いや、どうしまして。」

大浦はさりげない言葉と共に、マツチの箱をポケットへ返した。

しかし保吉は今こんにち日もなおこの勇ましい守衛の秘密を看破かんぱしたこ
とと信じている。あの一点のマッチの火は保吉のためにばかり擦す
られたのではない。実に大浦の武士道を冥々めいめいの裡うちに照覽しょうらんし
給う神々のために擦られたのである。

(大正十二年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

保吉の手帳から

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>